

日本天文学会オンライン報告会（2024年3月19日）

26期日本学術会議報告

- （1）26期日本学術会議の発足
- （2）日本学術会議の在り方に関する状況

(1) 26期日本学術会議について

2023年10月より第26期がスタート

* 日本学術会議とは：我が国の平和的復興、人類社会の福祉に貢献し、世界の学界と提携して学術の進歩に寄与することを使命として日本学術会議法に基づいて設立された日本のアカデミー。

* 会員・連携会員：1期3年、2期の任期。

* 組織（右図）：第三部（理学・工学系）内に11の分野別委員会があり、天文学・宇宙物理学分野の会員・連携会員はその中の「**物理学委員会**」の下にある、**天文学・宇宙物理学分科会**と**IAU分科会**にて主に活動。

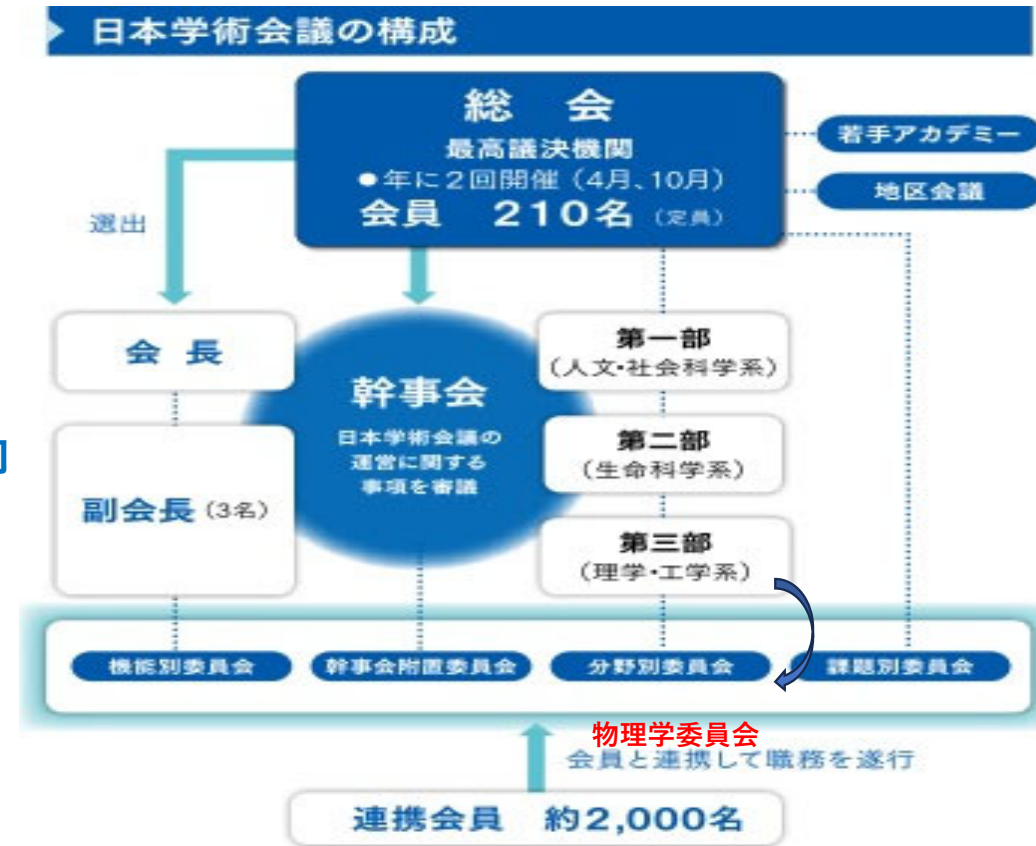
25期から継続：【**日本学術会議のより良い役割発揮に向けた取組**】

* 提言の査読プロセス見直し

* 会員選考に広く推薦を募る

* 分科会活動の活性化・適正化

など



(1) 26期日本学術会議について (つづき)

分科会の発足

- 物理学委員会の下に、IAU分科会ならびに天文学・宇宙物理学分科会が設置・承認
- 第1回分科会において幹事団と新たな連携会員3名を承認

<IAU分科会ならびに天文学・宇宙物理学分科会>

構成員：会員3名、連携会員22名 計25名

委員（敬称略）：

<天文学・宇宙物理学分野> 奥村幸子（天宇委員長）、杉山直、浅井歩（天宇副委員長）、生田ちさと（IAU副委員長）、今田晋亮、大朝由美子、梶田隆章、河北秀世、坂井南美、新永浩子、住貴宏、田代信、常田佐久、長尾透、林正彦、深川美里、藤澤健太（幹事）、山崎典子、山田亨、渡部潤一（IAU委員長）

<地球惑星科学分野> 倉本圭、佐々木晶、藤井良一

<素粒子物理学分野> 中畑雅行、村山斉

オブザーバー：

<天宇> 国立天文台長、宇宙科学研究所長、東京大学 Kavli IPMU所長、宇宙線研究所長、日本天文学会長、宇電懇・光赤天連・CRC・理論懇・高宇連・太陽研連の代表

<IAU> 山岡均（国立天文台）、富田晃彦（和歌山大学）、清水敏文（宇宙研）

(2) 日本学術会議の在り方に関する状況

- ・ **【日本学術会議のより良い役割発揮に向けた取組】** <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-25-s182-2.pdf>
- ・ 「日本学術会議の在り方に関する有識者懇談会」 <https://www.cao.go.jp/scjarikata/kondankai.html>
 - 2023/8/29, 9/6, 9/25 (25期) , 11/2, 11/9, 11/20, 11/30, 12/13, 12/18, 12/21 (26期)
 - **中間報告 (12/21)**
<https://www.cao.go.jp/scjarikata/kondankai/chukanhokoku.pdf>
- ・ 「**日本学術会議の法人化に向けて**」 (12/22)
<https://www.cao.go.jp/scjarikata/20231222houshin.html>
- ・ **日本学術会議の対応** <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/division-20.html>
 - 会長メッセージ 2023/8/29, 9/8, 9/29 (25期) , 11/10, 11/20 (26期)
 - **臨時総会 声明 2023/12/9**
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-26-s190-s.pdf>
 - **臨時総会 アクションプラン骨子 2023/12/9**
<https://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/sokai/siryoy190-5.pdf>
 - **会長メッセージ (最新) 2023/12/22**
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/message231222.pdf>

(2) 日本学術会議の在り方に関する状況 (つづき)

* (会長メッセージより)

日本学術会議は、懇談会において設置形態に関わらず、アカデミーに必要な機能について開かれた協議が行われるようはたらきかけ、**中間報告**では声明で掲げた事項を含む懸念点に関して一定の反映がなされた。懸念点の完全な解消に向け、**今後の議論に学術会議として主体的に参画していく。**

・ 日本学術会議の対応 (つづき)

－ 会員説明会 2024/2/17

* **中間報告前文**「今後本報告を踏まえて、政府においては、日本学術会議の意見も聞きながら、**法制化に向けた具体的な検討**が進められるよう期待。日本学術会議においても、**引き続き必要な改革を推進**しつつ、建設的な議論が進められるよう期待。」

* **中間報告のポイント**：**会員選考、活動の幅の拡大、財政基盤の充実、事務局機能の強化、ガバナンスの強化**

* **日本学術会議としての対応**「**日本学術会議のあり方に関するWG**」「**アクションプラン企画WG**」を設置し、前者はあり方に関する制度設計等具体的な検討、後者はアクションプランの詳細を具体化する検討を行い、2024年4月総会にて検討内容を報告。

臨時総会 声明より

- いずれの形態であっても「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて」で示した5要件を充足することが不可欠。特に次の点が充たされる必要（第190回総会声明（令和5年12月9日））

<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-26-s190-s.pdf>

- ①活動面での政府からの独立性を確保。組織運営に関する法定事項を必要最小限に。評価制度等を含め、柔軟で自律的な組織運営を保証
- ② 会員及び会長の選考に当たっての自律性・独立性の確保。改革の要否及びその内容を自律的・独立的に決定
- ③改革は日本学術会議の機能強化につながるものであるべき。機能を減じるものであってはならない
- ④ナショナルアカデミーとしての機能を十分に発揮し、科学的助言の中立性を確保するため、国の責任による安定的な財政基盤の確保。国による財政支援の強化
- ⑤必要不可欠の改革を最も有効かつ効率的に行う

アクションプラン骨子

1. タイムリー、スピーディな意思の表出と助言機能の強化
2. 学術の発展のための各種学術関係機関との密接なコミュニケーションとハブとしての活動強化
3. ナショナルアカデミーとしての国際的プレゼンスの向上
4. 産業界、NGO/NPOをはじめとする多様な団体、国民とのコミュニケーションの促進
5. 学術を核とした地方活性化の促進
6. 情報発信機能の強化
7. 事務局機能の拡充を含む企画・執行体制の強化